

生活文化史 *Seikatsu Bunkashi*

<史料館だより>

目 次

- | | |
|----------------------|---------------|
| ◇芦屋・親王寺で活躍した深江の大工 | 室山京子・大国正美(2) |
| ◇深江の過去と現在の景観をめぐる | 菊地 真(5) |
| ～「古写真からたどる深江」展の内容紹介～ | |
| ◇ブラジル移民から見る日本と深江 | 西堀 紗世(9) |
| ◇深江にあった戦争 2 | 深江塾(13) |
| ◇深江物語(9) | 森口 健一(18) |
| 新道と旧国道 | |
| ◇写真が語る戦前の深江の幼児教育 | 大国 正美(22) |
| ◇入館者9万人 | (12) |
| ◇史料館日誌抄 | 道谷 卓・藤川祐作(24) |

2019.3.31
NO.47

深江村の中心地、字島の内（現在の深江本町三丁目付近）で、新道（18ページ参照）を東に向かって撮影した写真である（岡田亮至氏提供）。左に見える塀は、本庄村会議員、本庄村長、武庫郡会議員、郡会議長を歴任した岡田善蔵（南岡田家）の旧宅である。塀の中に一畝一五歩の畠を含む広大な屋敷だった。「たばこ」の看板が見える。新道とその北側が国道43号線の用地となり、建物は北に曳航したが、阪神・淡路大震災で全壊した。



神戸深江生活文化史料館

芦屋・親王寺で活躍した深江の大工

神戸大学大学院人文学研究科
地域連携センター非常勤講師
室山京子

大國正美

はじめに

江戸時代、深江村には有力な大工集団がいて近隣の普請を請け負っていたことが知られている。その活動は断片的にしか分からぬが、嘉永七年（一八五四）森村の四郎左衛門が居宅普請をした際に、普請を請け負ったのは深江の九郎兵衛であった（『本庄村史』歴史編）。近代では納多惣太郎などの活動が知られる（旧三条村共有文書）。

このたび、芦屋の親王寺の資料調査で、元禄三年（一六九〇）に「磯邊次郎左衛門尉信近」という大工名が記された棟札が見つかった（写真、解説）。親王寺は承知十一年（八四四）阿保親王の別邸に、持仏の阿弥陀如来を本尊にして建てられた阿保親王の菩提寺という伝承を持つ。阿保親王の末裔とする長州藩毛利家は、参勤交代では親王寺に立ち寄り、しばしば宝物を寄贈した。

棟札表面に元禄三年（一六九〇）六月の年代と当時の第十二世住職真誉上人秀那和尚の名が記載され、裏面には「深江村藤原御番匠」



【裏面】

深江村藤原御番匠

今福村川鶴兵衛尉「」

磯邊次郎左衛門尉信近

邊次郎左衛門尉信近 今福村川鶴兵衛尉「」と書かれている。元禄四年は阿保親王の八五〇回忌にあたり、毛利家から金泥心経などが寄贈されている。この棟札はその前年に当たり、阿保親王の八五〇回忌に關係する可能性がある。磯邊信近は、藤原姓を名乗り由緒ある社寺建築に関わっていて、有力な大工棟梁だったのだろう。深江の大工と磯邊次郎左衛門について現時点で判明していることを報告したい。

（この項、文責・大國）

調査の経緯

一〇一六年から二年にわたり芦屋市打出町にある淨土宗阿保山親王寺の所蔵資料が調査された。その担い手は歴史資料ネットワーク（史料ネット）を中心とする各地から集まつたボランティアである。一九九三年に新築された同寺の本堂は

一九九五年の阪神・淡路大震災で全壊、一〇一一年一月に再建された。その間に住職の交代も重なり所蔵資料の整理にまで手が及ばない事情があった。ある檀家が「芦屋古文書に親しむ会」を主催する知人に相談したところ史料ネット

当番 ■ 長

神力酒大光

【表面】
天下和順 日月清明 普照無際士 維時元禄二庚午年六月吉辰

無量寿經 【贊字8文字】
風雨以時 災厲不起 国豐民安 消除三垢冥 往來出入諸福那一世安全處
広濟衆厄難

ト関係者を紹介され、親王寺と檀家の協力のもと史料ネット主催での調査の実施が決まった。資料内容は古文書（約三六〇点・近代中心）や古典籍、屏風、軸物、棟札など。まず古文書・古典籍の調査を史料ネットと前掲「親しむ会」メンバーで行い、その後ボランティアを募って専門家の指導のもと屏風の解体と下張り文書剥離作業を進めた。下張り文書調査と並行して行った軸物調査は、「芦屋市史」に紹介された以外のものを中心に美術史研究者らが担当した。剥離やカビによる汚損などが見られたが、古文書が少ない状況にあるなかで軸物は歴史資料として貴重なものと言える。近世後期に全国各地で活躍し、住吉村の赤塚山に一時期滞在した徳本行者と親王寺との関係を示す軸物が確認されたことはその一例である。なお、二〇一八年一月には下張り文書および軸物調査について報告会と展示会を行い、軸物調査報告書を一部作成し寺に納めた。報告書に収録した軸物および関連資料は約九〇点である（報告書等の閲覧は親王寺に問い合わせが必要）。

（この項 文責・室山）

江戸幕府の大工支配と深江の大工組

大工は近世初頭には城を構築するのに欠かせず、その統括は軍事的に重要だった。そのため徳川家康は中井正清を大工頭に任命し、一〇〇〇石の知行を与え、近畿の摂津・河内・和泉・山城・大和の五畿内と近江の六ヶ国の大工を統括させた。中井家は代々大工頭として、江戸幕府が主導する普請や禁裏御用には大工役を賦課して大工を動員した。大工役とはもとは織田・豊臣政権が、職人を編成していくために身分に応じて負担させた役の系譜を引くものである。

中井氏のもとに統括された摂津の大工組織として、近世初頭は大阪市中を除いた在方には熊内村（神戸市）の仁左衛門組と島下郡福井村（茨木市）の吉左衛門組があった。仁左衛門組は深江を含む菟原・武庫・有馬・八部、すなわち概ね武庫川以西の村々の大工を統括していた。

やがて一七世紀末には尾陽村（伊丹市）の次郎右衛門を組頭とする尾陽（小屋）組が生まれ、三組体制となつた。仁左衛門組・吉左衛門組は次第に分裂し、安政四年（一八五五）に御所の内裏を造営したときは、福井村の吉左衛門系一〇組、熊内村の仁左衛門系が有馬郡域の摂州三組・兵庫四組の計七組に分かれ、大坂二四組と大坂大満組七組を合わせて四八組になつていた。

正徳元年（一七一）の尼崎藩領の「摂津国八郡郡苑原郡武庫郡河辺郡村々役高引帳」（『本庄村史 史料編』第一巻）によれば、いわゆる西摂の尼崎藩領で大工の役を負担していたのは、兵庫津・走水・深江（以上、神戸市）・西宮町（西宮市）・鴻池・萩野・荒牧（以上、伊丹市）・西川・今福（以上、尼崎市）の各町村だった。

深江の大工組織の変遷は定かではないが、熊内村の仁左衛門組に所属したのち、嘉永七年（一八五四）森村の四郎左衛門が居宅普請をした際には、小浜組（宝塚市）に所属していた。

深江村の大工高

深江村の大工の役負担の基準となる大工高は三三二石だった。大工高はかつて大工が所有していた田畠の石高で、田畠から取れる農作物には年貢が掛つたが、百姓に掛けられる百姓夫役が大工の所持する田畠には免除され、百姓夫役の代わり大工として勤員された。享和三年（一八〇三）は大工高「七石四斗三升」合に対する割合の年貢がかかり「二四石六斗四升九合」の米を収めた（『本庄村史 史料編』第一巻）。村の平均の年貢率七八%にくらべて高く、大工稼ぎがあるから可能だつたのだろう。

いったん決まつた大工高は大工稼業をやめても維持した（伊丹市史「第二巻」。文化七年（一八一〇）の調査では深江村で大工高を所有するのは七人で、一人四石五斗七升一合ずつを均等に所持していた。この合計は三三石となるので、正徳年間と変化がないことが判明する。

享和三年の大工高が二七石あまりになっているのは、大工高が減ったのではなく、大工高の田畠のうち四石余りが不作で年貢が免除されたという意味だろう。

磯邊次郎左衛門の系譜

松田直一氏が本庄村史編纂のために筆写した「本庄村誌資料」第三卷に、大工役人九郎左衛門、作左衛門、治郎左衛門三家の家族改めがある。出典は不明で何かの史料から大工役人の家族だけを抜き書きしたらしい。この史料を使って次郎左衛門家のその後を追ってみたい。

「本庄村誌資料」収録の家族改めに治郎左衛門が初出るのは元文五年（一七四〇）で六六歳。元禄三年の親王寺棟札が書かれたときは一六歳で、磯邊次郎左衛門尉信近の子か孫だろう。妻は先代九郎兵衛の娘だが、九郎兵衛も冒頭述べたように大工だった。大工役人の作左衛門も先代九郎兵衛の娘を嫁にもらっているので、同業者が婚姻関係でも結ばれていたことが判明する。

治郎左衛門は七二歳の寛保四年（一七四四）まで大工役人を務め、寛延三年（一七五〇）には治郎左衛門は三九歳で登場、隠居の父教通は七七歳なので、治郎左衛門は子に譲って教通と名乗っていることがわかる。宝暦三年（一七五三）・同四年には善太郎として登場している。しかし善太郎の年齢は四二歳と四歳で、長男助松、次男弥三郎、長女さきの家族名も一致するので、寛延三年の治郎左衛門が改名したことは疑いない。助松は宝暦四年段階で一六歳だった。

そこから記録は三八年間空白で、次に登場するのは寛政四年（一七九二）。治郎左衛門五四歳で、代替わりしている。この年齢は宝暦四年に一六歳だった助松の年齢と同じであり、助松が襲名したのだろう。それを裏付けるのは、宝暦四年に助松の母は三七歳で、寛政四年には七四歳になっているが、治郎左衛門母・妙西七四歳として記載されているからである。さらに寛政四年時の治郎左衛門の長男は米

藏一五歳。次の寛政十年は家族構成に変化がないが、その次の文化十二年（一八一五）になると、治郎左衛門は三八歳になっており、寛政十二年の米藏の年齢と一致する。何より寛政十二年の米藏の母とめが、文化十二年の治郎左衛門の母とめとして登場しているので、米藏が襲名していることははっきりする。記録は文政七年（一八二四）を最後に途切れている。

以上、まとめる元禄三年の次郎左衛門尉信近の子か孫が元文五年（一七四〇）当時の治郎左衛門と思われ、以後善太郎・助松・米藏と、それぞれ嫡男が後を継ぎ、いずれも治郎左衛門を名乗った。家族は夫婦を主体とした単婚小家族で、時に父母を隠居扱いで同居したり弟を同居させたりすることもあったが、弟が家族改めに登場するのは寛政四年と十年だけで、例外的だったようだ。大工職人は婚姻関係で結びつきを強くしていた。

おわりに

江戸時代に深江にとって重要な大工の家柄は近代にはどうなったのかは不明である。共同墓地の深江ブロックには磯邊家の家が三冢ある。このうち大日神社奉賛会の会長を務め深江財産区の理事も務めた磯邊信三氏の父は次郎は昔船大工だったという（磯邊謙氏による）。しかし治郎左衛門とのつながりは不明である。

ほかに磯邊家の墓が二ヵ所あり、昭和三十六年に磯邊治郎吉が再建した「磯邊家歴代之墓」が現存するが、もとは「文化十五年 磯邊五郎左衛門」と側面に掘られている。ただ再建された墓なので本当に五郎左衛門だったのか。治郎左衛門を読み誤ったのではないか？など想像が膨らむが事実の壁は厚い。改めて江戸時代は遠い過去になりつあることを実感する。

（以上、文責・大団）

深江の過去と現在の景観をめぐる

「古写真からたどる深江」展の内容紹介①

神戸大学名誉教授 菊地 真

はじめに

平成三〇（二〇一八）年度、神戸大学海事博物館において、企画展「古写真からたどる深江」を開催した。海事博物館は海や船に関する展示を行っているが、今回は大学のある地元、深江区を取り上げた。「本庄村史」などを手掛かりに、古写真や地図を片手に街なかを歩き、過去と現在を対比させ、思考を巡らせた。ここでは展示概要を紹介し、学生たちと見出した深江の景観の一端をご紹介したい。^②

深江という場所——土地の歴史と景観からの思考

近世にあつた深江村は、明治の市制町村制によって西青木村、青木村と合併し、本庄村が誕生したのは、周知の通りである。それまでの農村が次第に住宅や工場が立ち並ぶ、阪神間の都市域へと変貌していった。大正期には川崎商船学校が設立され、以後、神戸高等商船学校、戦後の神戸商船大学、そして現在にいたるまで、海技者を目指す多くの若者も集うようになった。

戦後は戦災復興のなか、神戸市に合併して神戸市東灘区の一部となつた。神戸市の東部海浜埋立事業で誕生した埋立地は、深江に漁業の終焉をもたらしたが、臨海工業都市としての新たな立ち位置を与えていた。埋立地である御影・魚崎・深江の浜町は、各種工場あるいは物流センターが立ち並び、深江浜町には神戸市東部中央卸売市場も置かれている。これらの工場等では、外国人労働者が多く雇用されており、深江一帯は外国人の町という、新たな側面も見せていている。



写真1 区画整理前の八坂神社(昭和38年)『本庄村史』より

深江という場所は、深江村や本庄村という近世・近代の土地と居住者のコミュニティによって形成されてきたが、阪神・淡路大震災から二四年が経過し、古くからの住民に加え、ここ二〇年来に移り住んできた新しい住民、外国からの移民、学生・留学生などなど、多種多様な人々によって、新たな地域コミュニティが創出されている。阪神線の高架化工事も進む現在、深江は以前と異なる風景へと変わりつつある。

興味深いことに、都市化著しい深江には、なおも昔と変わらない景観があり、土地の履歴を彷彿とさせてくれる。新たに「深江」という場所のあり方を考える際に、そのような、かつての深江の様相が何かの参考になるのでは、と考えている。

受け継がれる神社と景観

本庄村を構成した、かつての西青木村・青木村・深江村には、春日神社・八坂神社・大日靈女神神社

が古くから祀られてきた。深江

一帯が時代と共に大きく変貌するなかで、神社は場所を変えず、今もたたずんでいる。

春日神社は天上川沿いに位置する。一九三八（昭和一二）年の阪神大水害の記念碑を境内に残し、社殿も阪神・淡路大震災で被害を受け、神戸の二つの自然災害の記憶をたどれる場ともなっている。近隣に地蔵講の地蔵が大切に祀られているのも、ここに住む方々の信仰や旧来か



図1 旧本庄村の神社（明治44年発行の地形図による）阪神深江駅前に大日靈女神社が見える。深江の集落は浜街道沿いと海浜部にそれぞれ広がる。青木、西青木の各集落の北寄りに、八坂神社、春日神社が位置する。

大日靈女神社は大日如来を軸とした神社である。阪神深江駅前に大日靈女神社が見える。深江の集落は浜街道沿いと海浜部にそれぞれ広がる。青木、西青木の各集落の北寄りに、八坂神社、春日神社が位置する。

大日靈女神社と人との関わり

深江では、さまざまの神が信仰されていた。明治以降の都市化でその場を失った神社や祠は現在、多くが大日靈女神社に集められている。神々と、年中行事、深江地域の民俗性（ここでは神々や行事に結びついている信仰の性格、あるいは生業の特徴といつ

らの生活をうかがわせる。八坂神社は、国道四三号線・阪神高速の開通によって、バイパス道路の目の前に鳥居を構えるが、鳥居から南をよく見れば、深江浜を向いているのが良くわかる。かつて魚などが水揚げされ、戦後は東神戸フェリー埠頭として、四国や九州方面への船着き場としてにぎわった沿岸は、現在はサンシャインワーフというショッピングセンターとなっている。八坂神社裏には青木の地区会館が隣接するが、神社と会館の間に、実はもう一つ、赤い火の見櫓が立っている。一九六三（昭和三八年）年の写真に写っており、五〇年以上も、神社とともに青木を見守って来た。

大日靈女神社は大日如来を軸とした神社である。阪神深江駅前に大日靈女神社はひととき目立つ存在だが、深江の旧集落は神社東側に広がっており、今の駅前は村はずれであったと知る人は、どれだけいるだろうか。殿はひととき目立つ存在だが、深江の旧集落は神社東側に広がっており、今の駅前は村はずれであったと知る人は、どれだけいるだろうか。

五月に深江でも曳きまわされるだんじりは、最近は子供や女性の曳き手でも知られる。元米、甲南山手駅の北側にある森稲荷神社の例大祭であるが、この稲荷神



写真2 蹤り松 神戸高等商船学校敷地内、奥に見えるのは金毘羅宮

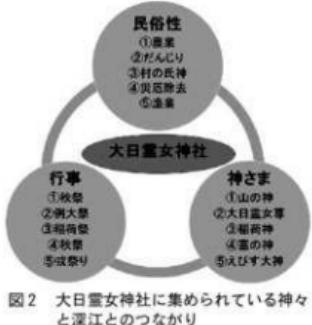


図2 大日靈女神社に集められている神々と深江とのつながり



現在、大日靈女神社の敷地脇に立てられている魚屋道の石碑は、深江と近郊地
域をつないでいた、道の役割の変化を教えてくれる。

魚屋道は、江戸時代から灘と、温泉地で有名な有馬を結んできた、東六甲の山越えルートの一つである。江戸時代はいわば抜け道として使われ、それゆえに周辺の宿場などと争論になることもあった。明治時代になると往来が自由となり、深江浜の新鮮な魚を有馬に運ぶようになつたため、魚屋道と呼ばれたと言われる。けれども明治以降は同時に、鉄道との競争を強いられた。

はじめは明治二〇（一八八七）年の国鉄住吉駅設置である。有馬へ向かう旅人は住吉駅から北上し、七曲り人口から魚屋道へと合流した。次の変化は、明治三二（一八九九）年の阪鶴鉄道である。神崎・福知山間に開通したこの路線に生瀬駅、三田駅が設けられた。生瀬は古来、有馬への東の入り口であった。魚屋道などの南北路にとつて、阪鶴鉄道を利用した有馬へのアクセス性の向上は、旅客を減じさせる元となつた。次いで大正四（一九一五）年に有馬軽便鉄道、昭和三（一九二八）年に神戸電鉄三田線、有馬線が開通する。三田あるいは神戸経由で有馬へ向かう鉄道ルートが整備された結果、有馬への旅客をはじめとした輸送の便是、鉄道が主体となつていった。そして魚屋道は、徐々に忘れられた道となつていった。

交通路として、一度はその役割を終えた魚屋道だが、しかし現在は再び、登山道として利用されている。神戸市による昭和四八（一九

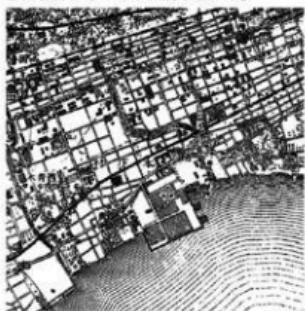
た意味）という三つの観点から考えると、深江の住民たちの生活サイクルと行事が密接に結びつき、信仰のカタチが次代へとつながってきたのが分かる。

山の神（大山祇大神）は、深江と有馬をつなぐ生活道路であった魚屋道沿いの山中に祀られていた。福荷神は森福荷神社の神のほか、踊り松のまことに祀られていた白玉福荷神社も合祀されている。ほかに塞の神や、漁師が信仰していた戎大神もある。神々だけでなく、道標・記念碑・石碑などの石造物までもが「深江史の庭」として神社の一角に集められ、現在の大日靈女神社の境内は、非常に賑やかである。この背景には、大日靈女神社が「大日ツアン」と親しみを込めて呼ばれ、深江の人びとの心の拠り所となってきた歴史がある。大日靈女神社と人びとの長い関係性が、神々の集う場という、現在の新たな役割を支えていると言えよう。

魚屋道は、江戸時代から灘と、温泉地で有名な有馬を結んできた、東六甲の山越えルートの一つである。江戸時代はいわば抜け道として使われ、それゆえに周辺の宿場などと争論になることもあった。明治時代になると往来が自由となり、深江浜の新鮮な魚を有馬に運ぶようになつたため、魚屋道と呼ばれたと言われる。けれども明治以降は同時に、鉄道との競争を強いられた。



図3 戦前における深江の景観変化
上は昭和7(1932)年、下は昭和24(1949)年の地図。次第に耕地が減少し、工場や宅地が増加しているのが読み取れる。



七三)年の自然歩道、「太陽と緑の道プロジェクト」によって、魚屋道もハイキングコースとして見直されてきた。当時は、戦後の四大公害に代表される環境悪化のなか、自然を見直し、自然に親しむ自然歩道が、環境保護・自然保護思想の高まりの中、広く受け入れられた。神戸市の太陽と緑の道や、兵庫県にもまたがる近畿自然歩道などがある。このように現在でも、魚屋道は役割を変えながら、人びとに利用され、記憶されている。

戦前の深江・村から都市へ
最後に、近代の深江の景観変化について触れておきたい。大正・昭和初期にかけて、深江一帯は、「村」から「都市」へと変わつて来



写真4 戦前の深江
正面が神戸高等商船学校。まだ川西航空機の工場が建設されていない。

七三)年の自然歩道、「太陽と緑の道プロジェクト」によって、魚屋道もハイキングコースとして見直されてきた。当時は、戦後の四大公害に代表される環境悪化のなか、自然を見直し、自然に親しむ自然歩道が、環境保護・自然保護思想の高まりの中、広く受け入れられた。

た。

昭和九(一九三四)年、室戸台風が本庄村を襲った。耕地も多くが高潮などの被害を受けたが、地主は耕地を復旧せずに、土地を転売することで利潤の追求を図り、小作争議が昭和一八年ごろまで頻繁に起ることとなつた。深江には次第に、住宅地や工場が数を増し、神戸近郊の都市域としての様相を強めていった。深江から隣の芦屋にかけては、大正時代につくられた深江文化村など、洋風の住宅も海滨部に立ち並んでいたが、郊外住宅地としての景観がより強まつていった。なお昭和二十四(一九四九)年の地図では、川西航空機の工場が特に目立つてゐる。

おわりに

展示では、生活文化史料館が所蔵する貴重な写真を借用させて頂いた。大國館長ほか、皆さまのご厚意に感謝申し上げたい。今回は地元の資料が豊富で、過去と現在の対比も容易だった。一方で近年の様子について情報が少ない分、現在の景観とその背景について自分たちで学び、考察する機会となつた点が良かったと感じている。神戸大学海事科学部は、前身の商船大学時代から、地元との繋がりは強いが、海事博物館としてこれまで、活動協力することは少なかったかと思う。これを機会に深江、あるいは生活文化史料館との結びつきをさらに強めていければ、望外の喜びである。

(注)

1 展示は本学学生を中心構築したものである。

本文も学生たちの成果に多くを依っていることを付記する。

2 近年の外国人増加の様相については、西堀による別稿を参照されたい。

ブラジル移民から見る日本と深江

はじめに

近年、日本における外国人労働者をめぐる問題はクローズアップされることの多いトピックである。事実、深江にも外国人、特に日系ブラジル人を中心とした多くの外国人が居住、就労している。

ここでは日本における外国人労働者の変遷と、深江におけるその現状を追っていきたい。

1 日本とブラジル間の移民の変遷

現在の日本には、多数の外国人労働者が流入しているが、かつては日本人も「外国人労働者」として南米に移住していた歴史がある。日系ブラジル人は、主に明治四一（一九〇八）年以降の移民事業で、ブラジルに移り住んだ日本人とその子孫のことを指す。ブラジルにおいて奴隸が禁止され、労働力不足が叫ばれていた当時、仕事を求めて南米に移住することが奨励されたのである。彼らの子孫（一世、三世と呼ぶ）や、また戦後新たに移住した一世は、日系ブラジル人としてブラジルに居住した。ところが、一九七〇年代ころ、ブラジルにおける経済的苦境がきっかけで、今度は日系ブラジル人が逆に、日本に出て南米に移住するという事態が発生した。日系ブラジル人による日本への出稼ぎに増加とともに、「出稼ぎ（デカセギ）」という言葉は、「Dekaessegu」と表記され、今やポルトガル語の単語として知られて いる。

ブラジルでは、一九七〇年代前半に「ブラジルの奇跡」と言われる、外國からの借金導入をもとにした好景気が訪れたが、七〇年代後半以降には、テクノ・アメリカ全体で激しいインフレーションに見舞われる

神戸大学 西堀 紗世



写真1 ブラジル移民発祥の地の石碑
海外移住と文化の交流センター前（旧国際立替移民収容所、後に神戸移住センターと改称）

など、経済的苦境が続くこととなった。その後一九八〇年代末には、ブラジルはハイパーインフレと呼ばれる水準にまで達し、ブラジルの経済は破綻した。このような背景で生まれたのが、日系ブラジル人の労働力としての移動、すなわちブラジルから日本への移民現象としての「デカセギ」である。八〇年代前半、戦後ブラジルに移民した一世の帰国から、デカセギは始まつた。一世は日本国籍を維持していることもあって、容易に日本で就労ができた。そして、八〇年代後半になると、昭和五九年（一九八五）年のブラザ合意で内高が進んだことをきっかけに、日本での就労が外国人にとって魅力的となり、低賃金での雇用を求める日本で外国人労働者全般への需要が高まつたことを受けて、デカセギの斡旋は各地でビジネスとして展開された。こうして移民の流れは逆転したのである。

さらに、統く平成二（一九九〇）年、出入国管理法が改正されたことによって移民は増加のピークを迎える。この法改正によって、原則として日系三世までとその家族が、職種の制限なく就労できるようにな

表1 都道府県別在留ブラジル人の割合

都道府県	総在留 外国人数 (人)①	在留ブ ラジル人 数 (人)②	各都道府県内の總 在留外国人数に對 するブラジル人の 割合 (%: ②÷①)③
兵庫県	107,708	2,435	2.2%
神戸市	48,612	419	0.8%
大阪府	233,717	2,657	1.1%
京都府	58,947	419	0.7%
近畿地方全体	497,649	28,429	0.5%
群馬県	57,072	12,628	22.1%
愛知県	251,823	56,942	22.6%
静岡県	88,720	28,807	32.4%

り、日本での高収入に着目した、もしくはブラジルで職を失った多数の日系ブラジル人が日本へ出稼ぎにくるようになり、日本国内でブラジル人口が急増した。

在留資格のあるブラジル人は、平成十九（二〇〇七）年の三一七万〇〇〇人をピークに減少したものの、二〇一八年現在は九万八〇〇〇人と、今なお相当数の在留ブラジル人がいることがわかる。彼らは自動車関連や電機関連、また食品工場などでの仕事に従事し、群馬県太田市、愛知県豊田市や静岡県浜松市などといった、期間労働者を多く雇用する工場の集中地域に居住している。

日系ブラジル人の多い地域として取り上げられるのは、先の関東地方や東海地方であるが、近畿地方では兵庫県も例外ではない。先に挙げた都道府県と比較すると大幅に少ないものの、平成三〇（二〇一八）年六月末現在の兵庫県の在留ブラジル人は二四三五人（表1②）。うち神戸市は四一九人で、各県単位の在留外国人中のブラジル人の比率において、大阪府よりやや高い（表1③）。これは、單に神戸市に工場が多いからではなく、戦前

の移民事業の際に出港の地となつていた神戸が、日系ブラジル人によつて、自身または先祖にゆかりのある地として認識されている可能性もあり、日本での高収入に着目した、もしくはブラジルで職を失った多数の日系ブラジル人が日本へ出稼ぎにくるようになり、日本国内でブラジル人口が急増した。

在留資格のあるブラジル人は、平成十九（二〇〇七）年の三一七万〇〇〇人をピークに減少したものの、二〇一八年現在は九万八〇〇〇人と、今なお相当数の在留ブラジル人がいることがわかる。彼らは自動車関連や電機関連、また食品工場などでの仕事に従事し、群馬県太田市、愛知県豊田市や静岡県浜松市などといった、期間労働者を多く雇用する工場の集中地域に居住している。

日系ブラジル人の多い地域として取り上げられるのは、先の関東地方や東海地方であるが、近畿地方では兵庫県も例外ではない。先に挙げた都道府県と比較すると大幅に少ないものの、平成三〇（二〇一八）年六月末現在の兵庫県の在留ブラジル人は二四三五人（表1②）。うち神戸市は四一九人で、各県単位の在留外国人中のブラジル人の比率において、大阪府よりやや高い（表1③）。これは、單に神戸市に工場が多いからではなく、戦前

で、自身または先祖にゆかりのある地として認識されている可能性も指摘できるだろう。

彼らは、夜勤や厳しい肉体労働など、日本人労働者が嫌った仕事を受けた。短期契約での出稼ぎが目的で日本に渡航した彼らだが、その後多くは日本定住を希望し、永住権、さらには日本国籍を取得することとなった。ブラジルの経済が再び活況を呈している現在でも、米日したブラジル人は日本に定住し続けており、一般にブラジリアンタウンなどと呼ばれる地域を形成している例もある。そのような地域では、ブラジル人を主な顧客としたスーパー・マーケットや各種商店が営業している。また、日本に住む日系ブラジル人やブラジル系日本人向けの、新聞や雑誌が発行されている例もある。

2 深江とブラジル出身の外国人労働者

第一章でも触れた通り、神戸においても在留ブラジル人は少なくなっている。本章ではこれについて、戦前からの地域の特色を踏まえながら見ていきたい。

近代以前から漁村・農村であった深江村は、明治に入ると本庄村の一部を構成していく。そして阪神間の郊外住宅地化や、日本全体の工業化の流れを汲んで、港湾都市に変化していった。大正期には川崎商船学校の創設や、護岸工事が進められた。さうに昭和二（一九二七）年の「神戸市都市計画街路に関する件」による都市計画、あるいは室戸台風や阪神大水害といった災害の影響により、地主は耕作地を小作に出さず、宅地や工業用地として提供する。

そして、深江は港湾都市であるがゆえの特徴的な歴史を抱えることとなつた。その例として戦時期における空襲被害が挙げられる。戦争に参加した日本は、各地に軍需工場を作つたが、深江にも一式飛行艇などを製作する川西航空機甲南製作所が建設された。それゆえ、本庄村は太平洋戦争の本土空襲の際に標的となり、多大な被害を受けた。

戦後は本庄村も神戸市に組み込まれ、復興政策が行われた。宅地化や団地の建設も進み、一九五〇年以降は、阪神間の住宅地として人気を集め、人口が急増するようになる。一九六九年には戦前からもともとあった土地のみならず、「深江浜町」の埋め立てが完成して新しく工場が並び立ち、深江は戦前よりもさらに規模の大きな港湾都市となつた。これ以降も深江の変化は絶えない。先に述べた一九九〇年の出入国管理法改定にともなって、ブラジルなど南米出身の日系人が急増し、深江でも外国人労働者の姿が見られるようになったことは、特に注目すべきである。出入国管理法改定以降、神戸を目指す日系ブラジル人も増加した。彼らの多くは深江周辺にある食品工場で、労働に従事している。深江南町の磯島公園にある阪神・淡路大震災（一九九五年）の慰靈碑には、南米系の外国人の名前が連ねられている。沿岸部には、震災以降も新たに食品工場が並び立ち、新しくアジア諸国からの外国人労働者も増加している。また、労働者だけでなく留学生も増加している。二〇一八年六月現在、東灘区全体で六〇三七人の外国人（うちブラジル人は一六八人）が暮らしており、外国人コミュニティを形成している。

3 現在の深江の街並み

最後に、外国人の多い「現在の深江」に焦点を当てて見ていただきたい。深江の街を歩くと、外国人の多い街としての深江の景色に出会える。



写真2 深江浜町上空写真

以下では、そのうちのいくつかを紹介したい。

東灘日本語教室

阪神・淡路大震災をきっかけに、日本に住む外国人をもっと理解し、支援しようという動きが強まった。この日本語教室は、平成一〇（一九九八）年、東灘区の深江地区に多く暮らしている、日系ブラジル人やペルー人の支援をするために設立された。

現在は、日系人のほかに、東灘区に住む中国人やフィリピン人、教室の近くにある神戸大学海事科学部の留学生など、約六〇名が通っている。大人向けの日本語教室と、日本語の苦手な、外国にルーツを持つ児童生徒を対象にした、日本語



写真4 東灘日本語教室



写真3 2018年現在の深江の景観
沿岸部には食品工場が並び立つ。

による教科學習教室を実施している。

外国の食料品店・飲食店

労働者とその家族も含めて長期定住する意識が高まると、特定の国での文化に特化した食料品店や飲食店が登場することを、エスニック・コミュニティの形成と呼ぶ。このように、工場等での労働だけでなく、同郷出身者向けの営業を行う人々が出現していると、移民定住の段階が成熟していることの指標ともなる。深江では、南米を中心とした国

参考文献

大久保武「日系人の労働市場とエスニシティ—地方工業都市に就方す

る日系ブラジル人」御茶の水書房、一〇〇五年

小内透・酒井恵真編著「日系ブラジル人の定住化と地域社会—群馬県



写真5 ブラジル食料品店



写真6 ペルー系のレストラン
「インカ」の文字が確認できる

入館者9万人は灘小学校児童

1月29日に、史料館の入館者が9万人に達しました。1981年2月開館以来39年目です。9万人目の入館者は、神戸市灘区の神戸市立灘小学校3年生のみなさん(51名)です。当日、道谷卓副館長より「来館九万人の証」と記念品を贈呈しました。



太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房、一〇〇一年
梶田孝道『外国人労働者と日本』日本放送出版協会、一九九四年
梶田孝道、丹野清人、磯口直人『顔の見えない定住化 日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会、一〇〇五年
梶原久美子『神戸市東灘区における日系ブラジル人コミュニティを考える』『関西学院大学 社会学部紀要』九〇号、一〇〇一年
丹野清人『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会、一〇〇七年
法務省ホームページ 在留外国人統計 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
(神戸大学文学部社会学専修生)

深江にあつた戦争

2

深江 江塾

昭和二十年（一九四五年）四月、松尾合子は本庄国民学校初等科の四年生になった。合子は本庄村で昭和十年七月に生まれた。もうすぐ十歳になる。合子の家は太正時代中頃から阪神深江駅の南、大日神社近く



写真1 「本庄国民学校沿革史」に記された学童疎開
神崎郡寺前村・粟賀村・大山村（現在の神河町）の寺院や教会、学校講堂に
集団疎開した

くで米穀店を営んでいた。松尾米穀店は、大日神社の西を南北に通る通称「深江銀座通り」の東側にあり、深江の「一等地」に位置している。現在は松尾酒店になっている。合子の家族は、父

母、兄、姉、弟、そして次女である合子の八人である。

学童疎開始まる

合子の通う本庄国民学校では昭和二十年四月二十三日から学童疎開が開始された（写真1）。初等科の三年生から六年までの児童がその対象となった。学童疎開は空襲の被害を避けるため、子ども達を都市部から農村部へ避難させる国策に沿った行動である。疎開には集団で農村部へ行く児童と、農村部に親戚があつて個人的に受け入れてもらう縁故疎開の一通りがあった。合子には今のは兵庫県たつの市新宮町に父方の家があった。合子は縁故疎開である。

深江からは阪神電車で三宮に行き、そこで国鉄に乗り換えた。姫路で姫新線に乗り継ぐ。屋根のない貨車である。姫新線には少なからずトンネルがある。トンネルに入るたびに合子たちは風呂敷で顔を包んだ。汽車の吐き出す煙やススを防ぐためである。本庄村は都会という



図 松尾酒米穀店と大日堂女神社

ほどではないけれど、当時の新宮町は、畑や田んぼが広がり子供の目にもいかにも「田舎」という感じがした。松尾米穀店は阪神電車の深江駅から子供の足でも二分ばかりのところにあり、店の前には常に人通りがあった。いつも人の気配が身近に感じられた。

その意味では合子は都会の子であったかもしれない。
疎開地についてからは合子も家事の手伝いをした。牛の世話、その飼料となる草刈りが主な仕事であった。深江では遊びとして土いじりをする事はあっても生活のために草や土にふれることはなかった。やはり町の子であった。

深江の家に帰りたい

疎開地に着いたその時は、明日からどんな生活が始まるのだろうかというほんやりした期待もあった。子供らしい單純な想いである。疎開地で初めての夜、寝床に入ると合子は「父や母は今頃どうしているのだろうか」、「私がいなくなつて不安に思つていいだらうか」と自分自身の身の上の不安よりも父や母のことが気になった。

日差しがある時間には、「あっちのほうには我が家があるのだ」と東の空を眺めた。日暮れになれば歸つている牛が「モウ」と騒ぐ。合子にはその牛の声さえ物悲しく牛が何かを求めているような声に聞こえる。夜、寝床につけば父母の顔が浮かんでくる。自分に向かって笑っている顔、自分を叱つている顔、さらには自分に向かって話しかけている言葉の数々が次々と胸のうちを通り過ぎる。父の姿や表情、身振り手振り、言葉が十歳の合子の胸に錠の石となってくる。

何度も寝返りを打つ。遠くで列車の走る音が聞こえる。汽笛の音が聞こえる。汽笛の音の尾が消えていくときは自分の体まで消えていくような心細さがあった。「あの列車に乗れば家に帰れる」「今からでもすぐにあの列車に乗りたい」。そして「どんなに叱られてもいい」。いや、「その叱る父や母の声が今すぐ聞きたい」という思いが体の底から

湧いてきた。次々に浮かんでくる思いと共にその数だけ涙が頬を伝つた。

五月の半ばになつて突然は母がやってきた。合子は「一緒に帰れる」と喜んだ。母は言う。「深江には五月の十一日に大きな空襲があった。たくさんの爆弾が深江に落とされた」「たくさん的人が死んだ」「多くの家が壊れた」と。その話から空襲が怖いものだと聞いていたけれど、それ以上に「母と一緒にいるなら怖くない」「早く家に帰りたい」と訴えた。母は、「もう少しがまんしなさい」「必ず迎えに来るから」と涙を流すわが子を突き放した。

五月十一日の川西航空機の工場を目標にしたB29爆撃機の圧倒的な空襲の破壊と村の惨状を知る大人の行動であった。「帰りたい」というわが子を残して再び深江に帰る母はまた身を裂かれる思いであったに違いない。

母が深江に帰った後、合子の心には單に家に帰りたいという気持ちとは別の不安がよぎるようになつた。「父や母が空襲で死ぬのではない。家族が死んで自分だけが取り残されるのではないか。もしそんなことがあるのなら、いっそ自分も父や母のそばで死んだほうがマシだ」という想いである。

疎開して三ヶ月が過ぎようとしていた。入道雲が湧く。稻の緑が波打っている。夜になるとカエルの合唱が聞こえる。神戸のほうでは何度も空襲があり家が壊され人が死んだといううわさも聞こえてくる。「必ず迎えに来るから」という母の約束を信じて合子は日々を過ごした。

昭和二十年八月五日の朝、母がやってきた。「迎えに来た」という。合子には空襲の怖さよりも父の側にいつもいられるという気持ちが強かった。深江に帰る列車の中で、五月十一日の本庄の村や深江の惨状を聞いたような気がする。しかしあの日から七十年を過ぎた今日で

は子供心にはまだ深江に帰ることのうれしさばかりが記憶に残っている気がする。

我が家に帰ったその夜に

八月五日の夕刻に深江の我が家にいた。深江を離れてからちょうど三ヶ月が過ぎていた。五月の空襲のことも聞いていたけれど我が家は自分が疎開する前と同じようにそこにあった。松尾商店は、深江駅から南に向かう通称「深江銀座通り」に向かって西に店が開いている(平成の今と変わらない店構え、図1)。通りに面して店と住居。店の裏、東側に幅四坪ほどの空き地を隔てて半屋の倉庫が建っている。店と倉庫の間の空地に防空壕が掘られていた。

壕は脇一枚ほどの広さで、深さは大人が座つて頭が隠れるほどである。

五日の夕刻、夏の夕暮れ

暮れの明るさの残るなかで令子たちは三ヵ月ぶりに家族で粗末な夕食をとった。家に帰った安心感の中で令子はたちまち寝入った。深夜、彼女はサイレンの音を聞いた気がした。父が叫びながら「防空壕に入つておれ」と追立て、壕に誘導し



写真2 空襲を受けた大日靈女神社付近

た。父は家族が壕に入るのを確認し、軍服姿で外に出て行った。父は警防團のリーダーとして警報が鳴るたびに近隣を見回っていた。灯火管制のもと、真っ暗な中で壕の中ではうすくまつっていた。轟々と爆音が響いていた。令子には「空が割れる」様なひびきに聞こえた。母が「お父ちゃんはどうしているやろ」とつぶやく。

女子供が壕の中でおびえ座り込んでいるとき父が走りこんできた。「ここにいたら死んでしまう」「すぐに逃げろ」とせきたてた。はいざるよう令子たちは壕を出で倉庫の裏を廻った。店の屋根の上でカンカンと金属音が聞こえる。焼夷弾が屋根瓦にぶつかる音である。倉庫と隣の家の間に子供の背丈ほどの生垣があった。彼女たちが倉庫を抜けて生垣のそばに来たときの前に焼夷弾が落ちてきた。焼夷弾は落ちると同時にカッと火の手が上がる。見る間に生木が燃え出した。屋根瓦の上で燃え出した焼夷弾の油脂が火のついたまま軒下に流れ落ちてくる。それは「火の雨だれ」のように見えた。火のしづくを見るたびに立ち止つく。

火に追われて

北にある大日神社のほうへ向かつた。何軒かの家の間の路地を抜けでとおりを隔てたところが大日神社である。走り抜けようとした路地にある家に焼夷弾が落ちてきた。屋根を突き抜けた焼夷弾がはじけてブワッと火の手が上がる。令子は動けなくなった。座り込んでしまつた。いわゆる腰が抜けた状態である。父が「立つて」と叫ぶ。令子は「靴がない」と答える。父は「そのまま来なさい」と令子を引きずる。彼女たちは大日神社の南の通りに出た。この通りは芦屋方面から深江を東西に抜ける「西国浜街道」である。道が燃えていた。令子には地面全体が火を噴いているよう見えた。闇の中だけにおさら全てが燃えていると見えたのである。神社を北に見て西に向かう。浜街道と銀座通りのあたりで幾組かの家族が「何處に逃げよう」「どうし

よう」といっているのだろう。何かを叫びながらうろついている。気が動転しているのである。自分がなにをしているのかどうしたらよいのやら判らなくなっているのである。爆弾の音も恐ろしいけれど焼夷弾による火災は動物としての本能的な恐怖心を起こさせるようであつた。

この頃の日本の大都市に対する焼夷弾空襲の多くは夜間であった。無差別爆撃という慈悲心のないひびきのある言葉があるけれど、この夜間の焼夷弾空襲は、人間の恐怖心を極限にまで追い詰める心理的効果があつたのではなかろうか。

父が神社の西南かどに立って「高橋川へ逃げろ」と怒鳴りながら指差す。うろたえていた人たちには我に返ったように三人、五人とそれが固まりになっておよそ一〇〇人はど先にある川に向かった。幅が二疊ばかりの「深江橋」がある。橋の下の周囲には一〇人ばかりの人たちが体を寄せ合って集っていた。

川の水面が燃え出した。焼夷弾の油脂が川に流れだし、それに火がついたのだろう。燃える油の塊が次々と流れてくる。その火の手をあげるかたまりが數を増し川面全体が燃えているようになってきた。火の川である。川の東西に並んで建っていた住宅にも火の手が上がった。台子は顔が熱くなつて痛いくらいになつていて、それに体が震えた。歯が鳴るほどの震えである。

爆撃の終わつたあとで

どれくらいの時間が過ぎたのであろうか、大粒の雨が落ちてきた。子供の指の爪ほどの大きさの雨粒である。体にかかる雨粒はなにやら黒いススのようなものを含んでいた。黒い雨である。ひとしきり激しく降つた黒い雨が止んだとき、燃え出した周囲の家の火は収まつていだ。

川の岸を上がつて家のほうへ戻ろうと歩き出した。爆音が聞こえて

きた。第二波の空襲だと皆は再び高橋川に戻つた。川は水面に火のついた油を点々と浮かべて流れている。川には入れなかつたので岸に上がり大日橋を西に渡つて本庄国民学校（現・本庄小学校）のほうに逃げた。学校の東の一角には緑の葉が空を覆うように繁らせた大木がいくつもあるおきな屋敷が何軒かあつた。その家は多羅尾さんや岩谷省三校長先生の家であったと合子は記憶している。聞こえていた爆音は遠ざかっていた。飛行機からは爆弾は落ちてこなかつた。

真夏の夜が明けってきた。八月六日の朝である。高橋川から東にある自宅に戻つた。自宅前の通りの南の方で人が倒れているのが見えた。三人の大人のようであった。遺体である。男の人が二人仰向けに、一人の女人の人でうつぶせに倒れている。煙にまかれて窒息して死んだのか。体が異様に膨らんでいるが焼け焦げた様子はない。女人の手の先には、数個のジャガイモと玉葱が散らばつていた。

ご遺体は七日の朝、消防団の人たちによってどこかへ運ばれていった。消防団の人たちがご遺体の下に太い木を両側から差し込んで大八車に載せた。

松尾商店の周りの家はみんな焼けてしまつた。松尾商店の店も倉庫も焼け落ちていた。店に置いてあつた大量の玄米が焦げて盛り上がりのように固まつていて。完全に夜が明けた頃、「営団」の人という役所の人が数人やつてきた。彼らが父に言う。「米は誰にも手をつけさせね」と。父はその夜は営団の人の言われるままに番をした。

すっかり暗くなつた頃、松尾商店の近くにあった「銀鉛」という喫茶店の人が来た。「病氣で動けない息子が、空襲の前から何も食べていません」「茶碗一杯で結構ですから、お米を分けていただけませんか」と頭を下げる。役人から「誰も米には手を付けさせるな」と命令されている。父はその女人の人無言で背を向けた。後でその女性が頭を下げて、氣配を感じながらその場を離れた。

空全体が白み始めた頃、父はある女性が立っていた場所に戻った。火災で表面全体が焼けこぼれ、空襲の後の雨で湿った米の山の一箇所に、ちょうど茶碗1杯分をすぐった後が残っていた。すくなくその部分だけに焦げ目はない米が見えた。父はなぜか「ほっとした気分になった」と後日、語っていた。六日の夜が明けきった頃、役人を乗せたトラックがやってきた。彼らは米の山を袋につめトラックに載せるとそのままどこかへ立ち去った。

松尾商店

店をはじ

め阪神深江駅から

南側一帯

は、ほと

んどの家

が焼失し

ていた。

人々はか

ろうじて

残る家の

基礎石を

見て、そ

こが自分

の家であ

ることを

知る。令

子たちは

六日の夜



写真3 薮開から戻った本庄小5年生
(昭和21年、藤本吉江氏提供)

は深江駅の北東に工場と社宅を持つ北城ハッカ会社に行った。その会社の経営者が父の友人であった。松尾の家族はその父の友人の厚意に甘えて社宅の一つを提供してもらった。

七日の朝、令子たちは母の実家である芦屋の三条町に移った。しかし、実家といえどやはり一度は嫁に出た家である。長居することがはばかられた。松尾の家族は八月十日の朝、父の実家である新宮町へ行くことになった。令子にとっては縁故疎開でついこの間までいたところへ舞い戻ることになったのだ。今日は一人ではなく家族も一緒にあらることが救いであった。

令子たちが新宮の駅に降りたとき、その列車に乗ろうとする兄の福夫と会った。福夫は陸軍の学校に行っていたが神戸が空襲にあったということで家族の安否確認のため、当地にやってきたのである。兄は新宮駅から再び神戸へ帰ろうとしていたところであった。一列車違えば家族が一堂にそろうことのない奇遇であった。

八月十五日正午、大人たちはラジオの前に集まっていた。令子はラジオ放送が終わって偶然としている大人たちを見て叔母に「何の放送だったの」と聞いた。叔母は「天皇陛下のお話じゃった。日本が戦争に負けたということじゃと」。令子は戦争に負けるということが何を意味しているのかよくわからなかつた。戦争に負けた悔しさとか悲しみはなつたような気がする。

「もうB29はやつてこない」「あの、空の割れるような音がする空襲はなくなる」「深江に帰れる」という喜びが湧いてくる気がした。涙がぽろぽろとこぼれた。

松尾（現姓大西）令子氏は深江生まれ、深江育ちで現在、深江南町四丁目住である。その体験談を深江塾の森口健一が三回にわたり聞き取りしてまとめ、深江塾で検討の後、大国が加筆修正したものである。

深江物語（9）

新道と旧国道

深江塾 森口 健一

新国道から旧国道へ



明治十八年（一八八五）の陸地測量部の「仮製地形図」（左図）を見ると、深江の集落は東西に一本の道が貫いている。吉屋川の永保橋西岸から、吉屋と深江の境界である傍示川をまたいで深江に入る。これは西国浜街道であるが、「仮製地形図」では「西国街道」となっている。通常西国街道といえば、現在の国道二号線をさすが、明治前半は違って浜街道の方を西国街道と呼んでいたことがわかる。

当時、深江には浜街道と札場通が交差することになり、札場通から南北に分かれ、浜通に沿って南の海岸近くにもう一つの集落があった。深江の町は二つの集落からなっていたと読み取れる。札場通は海辺の浜エビス神社付近

から森村まで延びており、いわゆる「魚屋道」とはこの道ではないかとも言われている。

大正十年発刊の「武庫郡誌」によれば「所謂西国街道は、精道村より来りて、本村に入り、深江・青木・西青木の各字を貫きて魚崎に入り、明治二十二年までは、精道村打出より稍々山手の方を通り、本村北部を通過せしものなれども、同年打出より神戸に通する海辺の里道、国道に編入せられて、即ち現状となりしものなり」とある。ここに書かれている西国街道も浜街道のことで、明治二十二年までは北部を走る現在の国道二号線が国道だったが、この年、南を走る浜街道が新国道となり、国道二号線は旧国道になった。西国浜街道は、浜辺の発展により「仮製地形図」では西国街道と呼ばれていたが、こうして国道の地位も得たのである。

このことは昭和十一年（一九三六）に発表された谷崎潤一郎の小説「猫と庄三と二人の女」（新潮文庫）の解説とも一致する。すなわち昭和二十六年発行の文庫の解説には「旧国道　京都と下関を結んでいた旧西国街道が、一旦、国道となつた後、明治二十二年頃、一般道路となつたため、旧国道と呼ぶ」となっている。

ところが解説は続けて「西国街道は、吉屋・神戸間では南北に分かれいて、山側の街道は、昭和二年四月に阪神国道（現・国道二号線）となって、新国道と呼ばれるようになり、海側の旧浜街道（現・国道四三号線）が旧国道と呼ばれた」とある。つまり昭和二年にもう一度国道の場所が変更になり、浜街道は新国道から旧国道になつたというのである。このため深江を走る浜街道は、旧国道とも呼ばれた。浜街道が「新国道」「旧国道」と呼ばれ、紛らわしくなつたのは、こうした歴史によつている。

ちなみに本庄小学校の校庭の南の堀に沿つて松が並んで植えられていた。これらの松は、浜街道に沿つて並んでいた松をイメージしたもの

のである。深江の浜辺は芦屋方面から松林が点在していたと伝えられている。現在では小学校に南東角に「名残の松」の碑、更に東には「涌松」の碑が残されている。

浜街道と新道

地図上では札場付近の集落の南の端と浜辺の集落の中間にもう一本の線が見られる。これが後に「新道」と言われる道で、神楽町（現・深江南町一丁目）と東町（現・深江南町二丁目）の境である津知川の西岸で西国街道から分離している。新道は、大日神社付近を抜けてくる浜街道と、本庄小学校の東で再び一つになる。

明治十八年の「仮製地形図」にある通り、明治時代は浜街道が深江の東西の幹線であり、その南の新道は地元の生活道路としての所謂「里道」であった。ところが大正十二年（一九二三）の地図（下図）では、新道が浜街道より広く描かれ、新道に「西国街道」と記入



新道は、幅員がおよそ三間、約六尺弱の道であった。一方、昭和二年の地形図を見れば、深江の集落は新道の南で増加が見られる。この結果、浜街道より新道の方が重要視され、深江では最初に舗装されて存在した道である。

防潮堤の役割もはたした新道

浜街道は周りの土地との高低差がほとんどない道であった。一方、新道は舗装するために若干の盛り土をして地盤を固めたせいであって、沿道の住宅地よりわずかではあるけれど道路地盤が高くなっている。現在の国道四号線沿いの標高が概ね一〇尺ないし一二・五尺であるのに対し、深江南町の大部分は一・五尺から二尺である。

深江は、防潮堤が昭和二十六年（一九五一）に完成するまでは度々台風による高潮に見舞われた。防潮堤ができるまで、戦後の一番大きな高潮は昭和二十五年九月のジェーン台風であった。このとき高潮は、新道の手前まで押し寄せたが、新道の南側で止まった。新道が深江の北地区への海水の浸水を防いだのである。

ジェーン台風のときの高潮は、津知川の西岸の南付近で大人の膝くらいの浸水であった。ちょうど新道の道路面と他の地盤面との差くらいいまで高潮が来ていた。新道を越えて北側は水田が多く地盤は低くなっているから、この道がなければ、高潮は深江南町地区だけでなく、少なくとも阪神電車の軌道敷あたりまで浸水していたはずである。

ただ、昭和九年の室戸台風の高潮は新道を越えて、阪神電車の南までやってきた。この台風は昭和の三大台風の一つであり記録的な台風

であるから、新道の路面高さでは防ぎようがなかった浸水である。

新道の往来、そして国道四三号線へ
昭和三十年代の初め頃まで、この道を通行していた車両は「バタコ」とか「バタバタ」と呼ばれた「くろがね」や「ダイハツ」のオート三輪である。この名はエンジンの音がバタバタと聞こえるところからその名がついたようである。ちょうど現在のバイクや単車のエンジン音を大きくしたような音であった。ちなみにこの「バタコ」は昭和三十年代半ばになると「ダイハツのミゼット」というオート三輪に多くの多くが取って代わられた。



写真1 昭和34年ごろの高橋川上空付近。
東西の太く白い部分が国道43号用地

一般の乗用車は国道二号线を利用していいのか新道では殆ど見ることはなかった。その乗用車も国産ではなく大きなアメリカ車ばかりであった。

新道には「バタコ」とともに牛や馬に引かれた荷車がゆったりと行き来していた。車道と歩道の区別も無かった。車道ではあったが、町の東西の幹線としてそれなりの賑わいのある道であった。

昭和三十年代半ば、国道四三号線用地の買収が進み深江の阪神より南の地区全体は大きく南北に分断された。現在の国道四三号線は深江地区においてはその大部分が、新道を北側に拡幅して造られ、四三号線の大坂方面行きの車線は買収によって住宅などが移転された。これに対し、南側の車線沿いは概ね現状で残された。幅五〇㍍の広い土地が高橋川から芦屋の永保橋まで広がることになった（写真1、2）。「この道は戦争になつたら滑走路にもなる」と訳知り顔で言う子どもももいた。

子どもと新道
新道は子どもにとってもたのしみの場でもあった。



写真2 工事中の国道43号

昭和三十年代半ば頃までのことである。「ロバのパン屋」である。

「ロバのおじさん、チンカラリン、チンカラリン」とやってくる。ジャムパン、ロールパン、焼きたていかがです。チョコレートオーバンにアンパンなんでもあります。チンカラリン」という樂しげな聲やかな音楽と共に新道を東のほうからやってくるのだ。本当はロバではなく馬がパンを乗せた荷車を引いているのだが、まるで童話に出てくる馬車のイメージの移動式のパン屋さんであった。

そのパン屋がやってくるのは、子どもたちが学校から帰って遊んでいる午後の時間が多かったように思う。毎日来るわけではないけれど、子どもたちはそのメロディーが聞こえてくると走ってパンを買いついた。買うだけでなく「ロバが引く馬車」の後をしばらくついてある子どももいた。

荷車を引くのは小型の馬（木曾馬とも聞いた）だったらしいのだが、

子どもたちは本当にロバがひいていると思っていた。「馬」は子どもたちがパンを買っている間、じっと立っている。しばらくするとまたメロディーと共にボコボコと荷車を引いて去っていく。何処から来たのか知らないけれど、うつむいて黙々と、荷車を引いていく馬を見てなぜか童謡の「月の砂漠」の情景が思い出された記憶がある。

見かけた。三宮センター街の東出口でこのパン屋のメロディーを何十年ぶりかで聞いて、筆者は童心にかえつて見にいったのである。蒸しパンを買ひながら「何處から来ているのか」と聞けば、京都からであるという。このときのロバのパン屋は馬ではなく車であった。

そういうえば、ロバのパン屋は昭和三十年半ば頃以降には見かけることはなくなった。新道が国道四三号線にかわるところであり、世間が車社会の入り口にさしかかっていたせいであろう。ロバのパン屋が新道を歩かなくなったり、牛や馬の荷車も姿を消した。

子どもの遊び場として

新道は子どもの遊び場の一つでもあった。往来する牛や馬の荷台に便乗することである。学校の帰り道にその荷車を見つけると、御者に隠れて荷台の後に飛び乗るのである。荷物によっては子どもが荷台の後に乗っていることは御者からは見えない。上手いけば学校から自宅近くまでほとんどを荷台に乗って帰ることができた。

ただ、時には御者に見つかって飛び降りる羽目になることも少なからずあった。荷台から飛び降りると、運が悪ければ糞の上に足がすっぽり入ってしまうことがある。牛や馬の糞は結構大きくて子どもの足がすっぽりなかつた。新道の横に流れる水路で洗うだけのことであった。牛や馬の糞は乾燥させて燃料にするとも言われるからそう不潔不衛生というわけでもなかつたのかもしれない。

新道を利用しての子どもの遊びは、芦屋方面と深江方面の路面の傾斜を利用して「飛行機」という遊びである。芦屋と深江の境界である傍示川あたりと津知川あたりまでの地点の標高差はおよそ四〇がある。国土地理院のデータによる傍示川西岸で六・六m、津知川西岸あたりで一・七mとなっている。

道具は長さ一㍍幅三〇センチの厚さのある板を胴体とし、同じような板を主翼に見立てたものである。それらの板の下にキャスターをつける。胴体の上に腹ばいになるか、腰掛けて道路の傾斜を利用して滑降するのである。

「飛行機」と路面とはキャスターの高さの差しかない。滑降しているときにバランスを崩すことも少なからずある。骨折にはいたらいいけれど、擦り傷は付きまとう危険な遊戯ではあった。それでも舗装された道は新道だけであったからこそできた遊びであった。

写真が語る戦前の深江の幼児教育

館長 大国正美

深江には戦前、愛児園というキリスト教系の「私立幼稚園」があった。昭和四年（一九二九）の卒園式の写真が残っていて、幼児二十人と保母ら四人が写っている（写真1）。村史編さんに協力いただいた浅野猪子さん、團野清さんが写っていて、前列左から四人目が團野さん、後列右端が浅野さん、保母のうち右端は春名先生だという。写真右側の背後、樹木の向こうに見えるのは、深江文化村を設計した吉村清太郎氏の家で、現在の深江南町二丁目、東公園の南に五〇坪ほど下がったところにあった。

大西令子さんと藤本吉江さんが、本庄ふれあいのまちづくり協議会機関紙「波の音」（平成二十二年三月）に以下のようにより紹介している。大西さんは昭和十年生まれで愛児園に通っていた旧園児でもある。

昭和の初期から始まり、戦前までは戦中の混乱の中、閉園になつたようです。主に深江と神楽町（現在の深江南町一丁目）、遠くは芦屋から、約一五名の子どもたちが通園していました。当時の幼稚園は、現在の幼稚園のように、ほとんどの子どもが就学前に通うようなものではなく、裕福な家庭や、家が商店などで父母共に忙しいといつた、ごく一部の子どもだけが通うものでした。この幼稚園では、先生の弾くオルガンで唄つたり、お弁当を持って来てみんなで食べたり、本庄小学校の運動会に参加したことなどもあったようです。遠足は、近くの梅林（現在の「深江南町二丁目」バス停東側附近）に行つたり、卒園式には園児らが花かごをもって記念写真を撮るという現在の幼稚園と同じような光景が八〇年ほど前にもありました。

これは團野清さんもほぼ同じ記憶を持つ『生活文化史』第三三号に同様の記録を残している。大西さんは米穀商の娘、浅野さんの弟で近世以来の酒造家永田家出身の水田健さん（昭和十二年生まれ）も通っていたことから、通っていた子供の階層が知られる。これらのことから、浅野さんや團野さんの卒園写真が現存する昭和四年から永田健さんが通園していた昭和十八年ごろまで、確かに存在したことが明らかである。ところが「兵庫縣音内學校、幼稚園、教員養成所、圖書館、青年團、婦人會」（兵庫縣總務部調査課編）などの公式記録には登場しない。その理由は不明だが、幼稚園の設置基準を満たさず、正規の幼稚園として認定されなかつたのだろうか。経営者など分からぬことだらけで、情報があれば提供してほしい。



写真1 愛児園の卒園式（昭和4年、浅野猪子さん提供）

愛児園の

公式記録を

追ううち

に、愛児園

に似た幼稚

園として愛

児の園幼稚

園を見つけ

た。この幼

稚園は本山

村森字森ノ

岡、現在の

森北町一丁

目にあっ



写真2 愛児の園幼稚園のクリスマスパーティ（昭和12年、黒田賢二氏撮影）

女児10人—となっている。愛児園と同時期に存在したのは間違いないので別の幼稚園だろう。

森地区なので国道二号以北の旧本山村の幼児が中心だったとは思うが、深江に居住していた子女が通っていた可能性がある。

というのも、大正期から昭和中期まで深江永江町（現深江本町一丁目）に居住した医師黒田賢二氏が撮影したアルバムの中に「愛児の園幼稚園」と題した昭和十一年のクリスマスでの写真が残っているからである。黒田賢二氏は栃木県の出身で大正三年（一九一四）大阪大学医学部の前身にあたる府立高等医学校を卒業、大阪市西区九条で黒田医院を開業しながら深江に住んだ。昭和十五年十二月の『灘深江土地区画整理組合の「土地区画整理登記申請書』にある黒田氏の申請書によると、黒田氏の大坂の住所は西区本町通一丁目五九番地。深江の住居は、字池ノ下で区画整理によって深江永江町六丁目一四番地になった。黒田氏のアルバムについては本誌四二号（一〇一四年三月）で、撮影した写真を紹介した。このたび孫の福田憲子さんから昭和十年から十二年にかけたアルバム三冊の寄贈を受けた。この中に、前述した「愛児の園幼稚園」のクリスマスパーティの写真が含まれている。

写真に見る園児の人数は愛児園の数より多く、「兵庫縣立内學校、幼稚園、教員養成所、圖書館、青年團、婦人會一覽」に記載された人数に近い。また左端にはピアノも写っていて、「オルガンを使っていた」という大西合子さんや団野清さんの記憶とも食い違う。いずれにしても戦前の深江の子どもたちの日常生活を写した一枚である。

なお公的な幼児教育といえば昭和十九年に本庄小学校に併設で本庄幼稚園が設置され藤田幸伸校長が園長を兼務、保母として廣瀬義子・藤井明子、助保母として松井嘉代子がいた。「本庄国民学校沿革史」によれば、「園児ハ桜菊ノ組デ七十四名ヲ入園」とある。しかし戦争が激しくなり昭和二十年は、保母は藤井明子一人となり、休園している。

史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇一八年四月～一九年三月

二〇一八年▽
トライヤー・ウイーク、本庄中学校二年生三名を受け
入れ史料館業務の体験

6月21日 南五箇小学校 六年生
(見学者 四三名)

9月18日 水木小学校 三年生
(見学者 五一名)

12月3日 八多小学校 三年生
(見学者 一八名)

△二〇一九年▽
1月8日 高羽六甲アイランド小学校三年生
(見学者 四三名)

1月16日 湊島小学校 三年生
(見学者 六四名)

1月18日 湊島小学校 三年生
(見学者 三六名)

1月21日 本山南小学校 三年生
(見学者 六二名)

1月22日 六甲アイランド小学校 三年生
(見学者 八四名)

1月23日 六甲小学校 三年生
(見学者 七一名)

1月24日 向洋小学校 三年生
(見学者 一七二名)

1月25日 福住小学校 三年生
(見学者 八〇名)

1月28日 春日野小学校 三年生
(見学者 五一名)

1月29日 本山第三小学校 三年生
(見学者 一五〇名)

1月29日 本庄小学校 三年生
(見学者 六〇名)

△二〇一九年生突破
見学者 八〇名

2月5日 本山第三小学校 三年生

2月6日 本山第一小学校 三年生
(見学者 一九二名)

2月7日 本山第三小学校 三年生
(見学者 三六名)

2月8日 宮本小学校 三年生
(見学者 五五名)

2月14日 東灘小学校 三年生
(見学者 五四名)

2月20日 本山第一小学校 三年生
(見学者 六五名)

2月22日 本山第一小学校 三年生
(見学者 六五名)

2月28日 東灘区民センター小ホール
片岡圭子／佐藤はま子／松田薫子／神田正治／樋口裕一／大國剛

編集後記

(藤川祐作記)

今回の号は、神戸大学との連携で生まれた二つの成果を報告した。江戸時代前期の深江の大工の棟梁の史料など、村史編纂は終わったけれど、まだ新しい史料が出てくる。図書館サービスも順調。史料館の窓口で、30年度は月平均98人が261冊を借りたが、31年度は2月末時点で172人が458冊を借りた。今後もPRに努めたい。

『生活文化史』 第47号 2019・3・31
発行／大國正美
〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-7
☎ 078-4453-4980 (FAX兼用)
<http://fukae-museum.la.coocan.jp/>